

■シリーズ 市民が語る戦争体験2

関東軍自動車連隊での任務

水野義彦さんの体験談

■絵画展 子どもたちが描いた

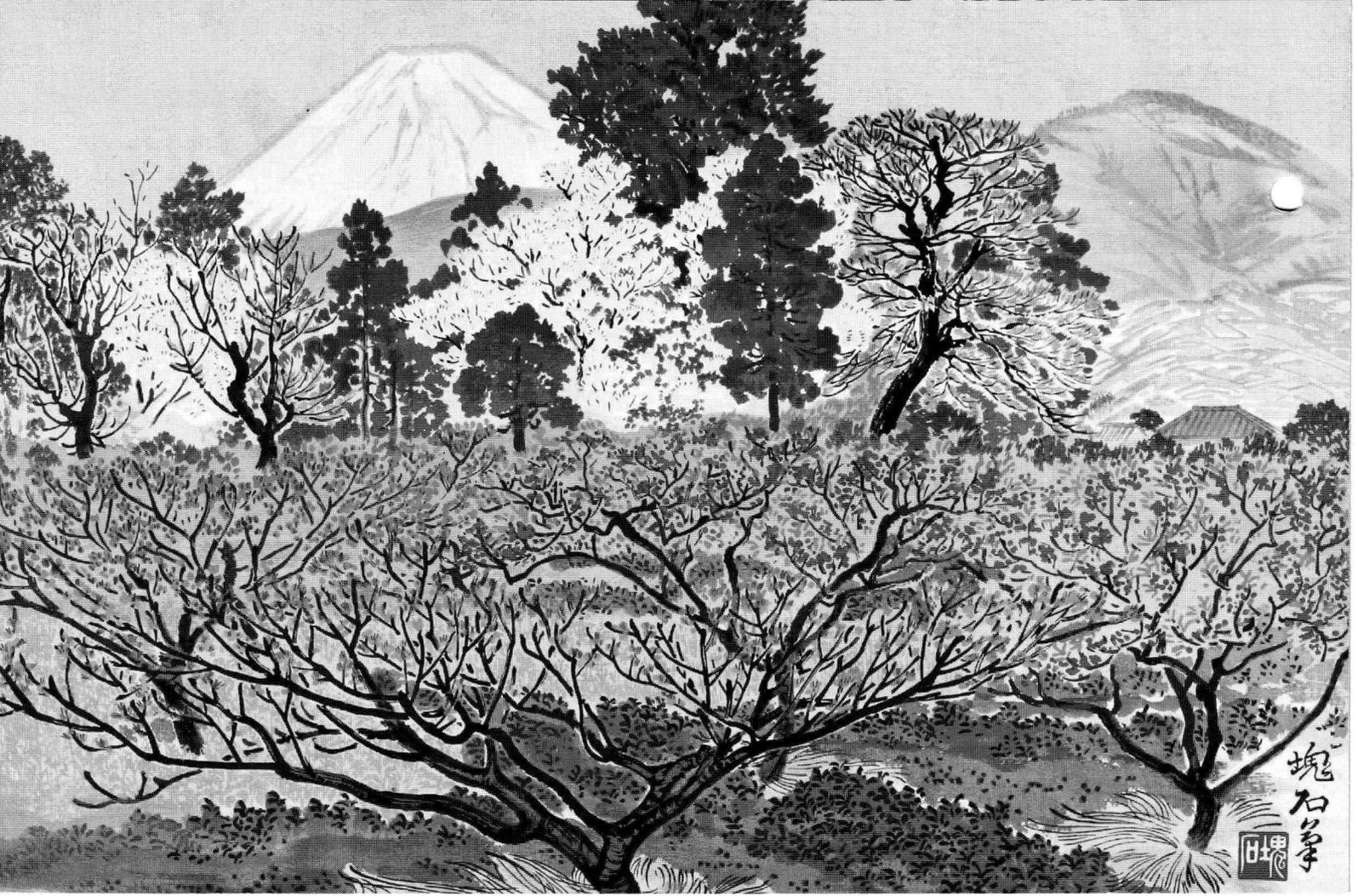
わがまちからの富士山より

二〇一〇年一〇月

通巻103号

沼津市明治史料館通信

堀石書



堀石筆



関東軍自動車連隊での任務

水野義彦さんの体験談

略歴

大正八年七月 沼津市本字出口町に生まれる

昭和一四年 徴集

昭和一五年二月〜一八年

関東軍自動車第四連隊三中队国境守備勤務

昭和一九年〜二〇年一月

第十三方面軍(名古屋)七三師団怒兵団司

令部自動車班勤務。本土決戦伊良子岬―御

前崎間の防衛にあたる。司令部は名古屋↓

岡崎↓豊川(終戦時)と移動した。



現役兵当時の水野義彦さん

十五の拠点に陣地構築

昭和一四年、徴集兵として関東軍自動車第四連隊に入った。自動車連隊のあるのは関東軍だけであった。第四連隊の如く数を推定出来る名称は使わず、防諜名として地方名や連隊長名で呼んでいて「東虎部隊」であった。

ソ連軍の極東への配備強化に対抗して、関東軍は、国境線の十五の拠点到国境守備隊を作り、陣地構築に着手した。その資材・兵器・弾薬・糧秣・備品などの膨大な物資の長距離輸送は、自動車部隊でなければ出来ない任務であった。通常、輸送専門の部隊として輜重兵部隊があるが、馬による輸送が主であった。

東虎部隊は国境の東寧に駐屯していた。烏蛇溝河(川幅二〇メートル、水深三〇センチぐらい)の中瀬が沢山あるような河が国境になっていた。

マイナス二〇度となると

不寝番は一晩中走り回る

自動車部隊の初年兵教育は三か月の一期教育から始まる。歩兵と同様、徒歩教練(銃を使った訓練)、それに自動車の基本操縦・用語が教えられる。機械を扱っていた者や生まれつき運動神経がよい者などは、初めての発進・停止もエンストなしで出来るが、これが困難な兵隊中にはいる。それこそ左の足を、ぐつと手で押さえて「ここが大事だ」と厳しく教える。これは自動車学校と同じだが、S形の前進・後進(軍隊用語で蛇行進・蛇後退)、クランク(隅角通過)、幅寄せ(側方転移)というのは同じ四角形の中で、車を右から左へ、左から右に寄せることを教える。こうして動かすことが出来るようになる道路に出る。隊列を組み、二〇メートルの車間距離を空けて伸び縮

みしないように走ることを徹底させる。

又、オイル、潤滑油、冷却水の点検、補充などもやる。冷却水は、冬はグリセリン五〇パーセント、水五〇パーセントの混合液をラジエーターに入れる。しかし、これはマイナス二〇度までしか効かない。それ以下になった時は、不寝番が五〇輜を端からエンジンをかけて回る。そして今度は順番に切って回る。終わると、又エンジンをかけては一回りする。そして、同じように切って回る。また、エンジンをかけて回るといくり返した朝までやっていなければならない。いつでも出動できる状態に保つために一晩中、走り回らなくてはならない。

二期の教育は「応用操縦」で、分隊や小隊でまとまって行動することを教える。自動車での資材や弾薬の運搬、積み降ろし(軍隊用語で積むことは「積載」、降ろすことは「卸下」といふ)などを訓練する。

用語解説

関東軍

日露戦争後にロシアから獲得した遼東半島(関東州)と南満州鉄道(満鉄)の付属地の守備をしていた関東都督府陸軍部が前身。一九一九年に関東都督府が関東庁に改組されると同時に関東軍として独立した。当初は独立守備隊六個大隊と内地から二年交代で派遣される一個師団の編成。

一九三二年、満州国が建国されると、関東軍司令官(後に総司令官)が駐滿大使を兼任するとともに、関東軍は満州国軍と共に満州国防衛の任に当たり、一連の国境紛争に当たっては多数の犠牲を払いながら、満州国の主張する国境線を守備した。

一九三九年のノモンハン事件では、関東軍はソ連軍と交戦し大きな損害を

三期はちょうど半年目になり、一般兵、工務兵、衛生兵、ラッパ手などに分かれる。一般兵は車輛整備・輸送・警備を主体にやり、工務兵は発動機工手、つまりエンジンア、それに鍛工・機工・木工・電工・装工(革製品)・縫工(衣服)などである。

四期になると耐寒行軍、河川の渡渉、難路通過、湿地通過などで、やっと一人前の兵隊になる。

犠牲的精神と堅忍持久

「輜重兵の本領」という教典によれば、「…間断なく且迅速確実に軍需品の輸送及び補給を為し、以て絶えず軍の戦闘力を維持し其の活動性を保有せしむるに在り。故に輜重兵は犠牲的精神に富み、堅忍持久の気力を具え、至大の行動力を有し…常に季節、天候及び地形と戦い、またしばしば敵の妨害を排除し、昼夜行動を継続してその本領を発揮するを要す…」

あくまでも輸送が主な部隊なので、戦わなければならない時だけは戦闘するが、当時の軍隊では考えられない「迂回」とか「後退」が行なわれる。それはその場の指揮官の判断でやる。行動中に他の将校、たとえば師団長命令といえども不服従でよいという形になっている。

夜間の無灯火行進は非常に厳しい。まったくの闇夜になると、鼻が抓まれても見えない。運転台の前のガラスが真横に上がるようなトラックもある。助手が運転

手の横のステップに乗り、片手でドアにつかまり、白い旗で「前、前」とか「右、右」とかの合図をする。或いは自動車の前を合図しながら歩くということもある。

本土決戦近し

戦局が悪化してきた昭和十九年、本土決戦に備えて第四連隊の一部に「転進命令」が出た。対馬海峡はすでに機雷が多く敷設され、これに触れ爆沈した輸送船もあった。

私は、名古屋の第十三方面軍七三師団怒兵団司令部自動車班に配属された。

関東軍には、翌二〇年四月、僅かな兵だけを残して、本土や南方方面に転進命令が出た。満州開拓義勇団や在留邦人を徴集、人数だけは補充したものの、軍事訓練も受けておらず、銃すら行きわたらず丸腰の関東軍であった。八月九日、ソ連軍の全満州国境からの侵攻にひとたまりもなく、悲惨極まりない地獄の状況となった。

名古屋での自動車隊は、米軍の本土上陸に備えて、伊良湖岬から御前崎に至る海岸線に陣地構築を急いだ。満州での頑強なトーチカのような陣地に比べれば心細いものだったが、本土上陸近しと懸命に資材運搬に従事した。しかし、兵隊たちの食糧難はひどく、司令部計理部の仕事として、食糧の確保、物資の調達も担当した。食糧は現地調達、自給自足が要求された。魚も獲るしかなく各隊から漁

師の経験者が地引網漁に駆り出された。しかし、肝腎の網がない。その材料となる稽(みご・藁の外側の葉や葉鞘を取り除いた茎の部分)を何とか調達、池新田や田子浦の業者まで運搬製造を依頼したが全く使いものにならぬと、製品を分けてもらったりした。又、昭和十九年、朝鮮人にも徴兵制度がしかれ、多くの兵隊がやってきたが、敏捷な行動がとれず、山間地の開墾、サツマイモ作りに使役しその監督にもあつた。

本土決戦の最後の拠点とされた長野県松代町の松代大本営も七八パーセント成した。

八月一五日、第四連隊は長野や新潟に駐屯していた中隊も司令部のある豊川へ集められた。本土防衛の名のもと、満州から転進してきた関東軍の精鋭たちにしてみれば、その後、ソ連軍に蹂躪されたことを思うにつけ、これでは一体、なんのために本土へきたのだ、戦わずして終戦とは余りにもやるせないという気持ちであつたが、遠藤部隊長から「我々としては誠に断腸の思いであるが、陛下の御聖断をよく理解し、それぞれ帰郷して、今後、命を大切にし、日本の復興のために努力してもらいたい」との示達があつた。

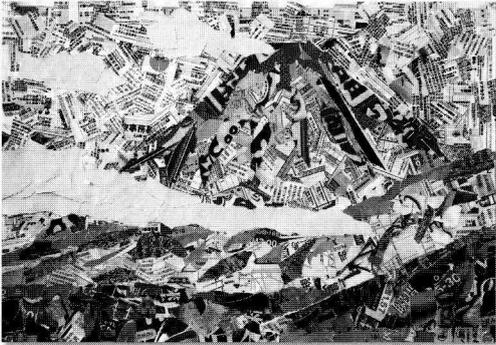
あらゆる兵器・小銃・軽機関銃・銃剣・弾薬・軍刀等を校庭の一角所に集積、米軍に引き渡した。車輛は輸送業務終了の十一月二日に引き渡し、自動車隊は解体された。

被った。ソ連軍の脅威が認識されたことや欧州戦線の推移などにより関東軍は漸次増強されており、一九三六年の日中戦争勃発前の段階で関東軍は四個師団及び独立守備隊五個大隊となっていたが、一九四一年にはさらに十四個師団にまで増強され、一時的に関東軍は兵力七十四万人以上に達し、「精強百万関東軍」と言われた。

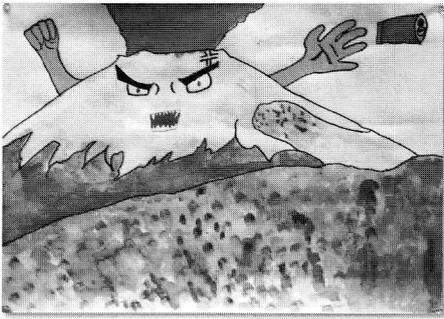
しかし、太平洋戦争の戦況が悪化した一九四三年以降、南方に重点が移り、関東軍から戦力が出された。その埋め合わせに一九四五年になると在留邦人を対象にいわゆる「根こそぎ動員」(二五万人)を行い、数の上では七八万人に達したが、その練度・装備・士気などあらゆる点で以前よりはるかに劣っており、満州防衛に必要な戦力には至っていないかった。

一九四五年八月九日に開始されたソ連軍の侵攻に対して、関東軍は国境で陣地防衛を行い、戦況の悪化にしたがって防衛線を南下させる守勢後退を行い、一方で、大連・新京防衛ラインで第三方面軍が展開して実際に持久戦が企図されていたが、反撃に移るまでに八月一五日を迎えた。正式に降伏と停戦の命令が満州の関東軍総司令部に伝えられたのは一六日夕方であった。(一部の前線部隊には停戦命令が到達せず、八月末まで戦闘行動を継続した部隊もあった)停戦後、関東軍将兵の多くは、ソ連の捕虜としてシベリアへ抑留され、過酷な強制労働に従事させられた。

絵画展 子どもたちが描いたわがまちからの富士山より



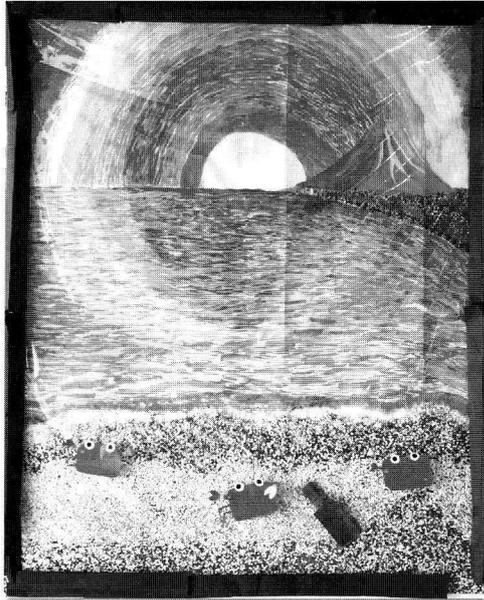
「家の窓から見た富士山」
原小学校 3年
杉山かずみさんの作品
ちぎり絵の作品は10点ほどありましたが、この作品は色調の違う広告を使って描かれています。



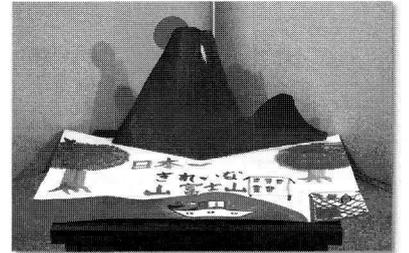
「ゴミがきれいな富士山」
金岡小学校 6年
芹沢将希さんの作品
ゴミを捨てられ怒っている表情が抜群です。環境問題にもふれる作品です。

たくさんのご応募
ありがとうございました

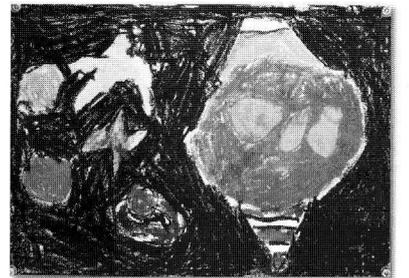
富士・沼津・三島3市博物館共同企画展「わがまちからの富士山 三市対抗富士自慢」に関連して、夏休みに市内の小・中学生から富士山の絵を募集し、絵画展を行いました。子どもたちのユニークで楽しい力作282点が集まり、4階展示室は富士山と子どもたちの夢でいっぱいになりました。全ての作品をカラーで紹介したいのですが、紙面の都合でここでは白黒で5点を紹介します。



「沼津側から見た原海岸ごしの富士山」
原中学校美術部のみなさんの作品
畳一畳ほどの大作で、カニの歩く砂浜は、穴あけパンチで抜き取った色紙を丁寧に貼り込んでいます。



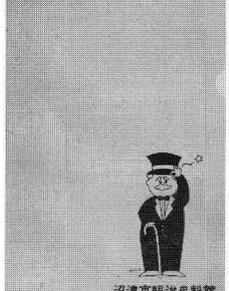
「大切な富士山」
今沢小学校 6年
芹澤りかこさんの作品
飛び出す絵本のように富士山がそびえ立ちます



「地球と富士山」
第二小学校 2年
鈴木伶苑さんの作品
地球の上に富士山、下に東京タワーという大胆でスケールの大きな作品です。

—お詫びと訂正—
前号「企画展に寄せて」1段3行目「沼津市歴史民俗資料館」は「沼津市歴史民俗資料館」、「沼津兵学校とその人材89」の集合写真内「荒井熊之助」は「荒井郁之助」の誤りです。
お詫びして訂正します。

出品して下さったみなさんへの参加賞として、「そろくん」クリアフォルダーを作りました。
今年度の博物館美習生、後藤悠さん・菅沼麻衣さん・渡邊鮎美さんがそろくんをデザインしてくれました。



8月21日の3館学芸員によるギャラリートークには、ふじっぴーも参加しました



沼津市明治史料館通信 第103号

平成22年10月25日

編集・発行 沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL055-923-3335
FAX055-925-3018

印刷
みどり美術印刷株式会社

表紙の解説

塊石画 上・御成橋と富士 下・原桃園の富士（昭和初期 当館所蔵）

塊石（定方）は明治15年（1882）岡山県に生まれました。渡仏し、サロン・ドートンヌに入選。のち木版画も手掛けました。生涯で雅号を3回変え、最初の号が「塊石」で、京都上加茂時代から昭和5～6年に東京文京区に定住する後まで使っていました。次は「耀慶」で東京定住後から、戦災で岡山県に移るまで、最後は「大塊」でした。

全ての雅号で富士山を描いた作品があり、生涯富士山を描いた画家と言えます。沼津・三津海岸からの富士山を描いた、耀慶時代の肉筆画も残っています。